

## 関係を築くということ

三浦雨林

### はじめに

応募の際、このプログラムで何を見るか、既に決めていた。東京芸術祭やAPAFで上演された作品は2017年から積極的に見ていたが、なぜ今年応募に至ったのか、ということから書き記すことにする。

大学入学と共に上京し、積極的に演劇を作るようになってからもう少しで10年が経とうとしている。いろいろな場所で、多くの方々と作品を作ってきた。うまくいかなかった記憶の方が多いが、専ら悩みは作品の中身のことばかりだった。しかし、この一年ほど、クリエイションの場で築く適切な関係性というものに、疑問が生じ始めた。学生から社会人になり、自分の年齢が上がるにつれて、自分が他者に与える影響を自覚し始めたのもあるが、コロナ禍においてコミュニケーション方法が大きく揺さぶられてしまったことも大きいだろう。クリエイションにおけるコミュニケーションを座組の外部から観察するため、知り合いに声をかけ、稽古場の見学をさせてもらったこともある。しかし、そういった場合の稽古場見学はほとんど一回や二回の非常に短い時間のみ。短時間の観察では、関係性の変化や影響はほとんど何もわからない。あまりに外部からの観察になってしまうと、言葉以外に交わされている情報が読み取れないからだ。

そんな中、2021年の東京芸術祭ファームの応募を知った。毎年作品や取り組みは見ていたが、応募に対しては足踏みをしていた。しかし、今年は私の近年の興味と開催内容・理念が合致していた。演劇が立ち上がるプロセスを、座組に介入しない立ち位置で伴走できる企画はほとんど無い。今回の東京芸術祭ファームのプログラムでは徹底的に関係性の観察が出来ると感じ、応募に至ったのだった。

参加をしてみて、やはり責任の伴わない立場でクリエイションの場に居合わせられるというのは、非常に貴重な経験だったと改めて感じている。今回はFarm-Lab Exhibition (以下Exhibition) や Asian Performing Arts Camp (以下Camp) を一度だけでなく、継続的に見学が可能だったため、クリエイションの場の関係性が変わっていく様や言葉以外に交わされるコミュニケーションをよく掴み取って観察することが出来た。

また、感染症対策のため、稽古場は厳しいゾーニングの制限下での見学となった。始めは、自分で稽古場の居場所を設定出来ないストレスがあったが、次第に居心地の良さを感じるようになっていった。それは、おそらくゾーニングされたその空間の中にいるしかないという状況が、Young Farmers Forum(YFF)の稽古場での立ち位置を“クリエイションに介入しない見学者”となるように機能していたからだろう。稽古場に現れた見えない壁は、ある種水族館や動物園のようなガラスの役割を得ていたように思う。

### クリエイションにおける継続的な関係性（演出家とパフォーマーと作品）

とにかく興味の軸は“演出家とパフォーマーのコミュニケーションと関係性の取り方”だった。

稽古場で起きるコミュニケーションを俯瞰した立場から観察することを目標にして、一ヶ月ほど稽古場にお邪魔した。

今回の東京芸術祭ファームのプログラムでは、コミュニケーションデザインチーム（以下CDT）という役職が設立されていた。Exhibitionの稽古初日、CDTのチーフである田村さんから「アートトランスレーターとCDTは、みなさんの分身だと思って頼ってください」という説明があったが、コミュニケーションデザインチームが通訳を担うというのはどういうことなのだろう、とあまりピンときていなかった。しかし、稽古が始まってみるとまさにその通りで、CDTの方々は可能な限りパフォーマーと一緒にあって実際にワークに取り組んでいた。クリエイションの中で意見が別れて場が白熱した時、通訳をすることによってクールダウンさせていた。また、適切ではない言葉が立ち現れた時、CDTの判断によって適切な語彙になって通訳された言葉もあった。アートトランスレーターという肩書きではなく、コミュニケーションデザインとしたのはそういうことか、と妙に納得したのだった。稽古場のゾーニングもあってCDTの方々とはほとんど話すことが出来なかったため、もしまた機会があるのなら、CDTというセクションにおいて大切にしている点をぜひお聞きしたい。

同じく稽古初日の説明において、制作チームから「セーフスペース」という言葉も提示され、主に以下の三点が共有された。

- ①コミュニケーションに時間をかけて、全員が納得できる場を作っていく
- ②性的・暴力的な表現をシェア・表現する際は必ず同意を取る
- ③個人的な経験をシェアする際、話さないという選択肢も取れるように場を形成すること

そもそも、東京芸術祭ファームでは、全体のガイドラインが設定されている。差別やハラスメントの禁止はもちろん、クリエイションの中で得た個人情報の扱ひまで幅広く包括されたもので、東京芸術祭ファームの参加者は全員このガイドラインを確認し、同意をした上で参加をする。

「セーフスペース」は上記のガイドラインにも記載があるもので、東京芸術祭で行われる新たな場づくりのベースにはこの概念があるということがわかる。東京芸術祭ファーム全体のこの意思表示は、見知らぬ人同士かつ若手の参加者として、非常に安心できるものだった。こういった考え方が目に見える形で設定され、約束されている（同じく参加者同士も約束する）というだけでも、プログラムへの参加態度や仕方が変わってくるものだ、というのは新たな発見だった。お互いがこのガイドラインに同意しているという安心感は、普段よりも早くお互いを信頼する材料になり得るだろう。ガイドラインには一見今や当たり前前のこと書かれているようにも見えるが、どうやらそういったものは書き過ぎるくらい明文化されていた方がいいようだ。“こちら側”の当たり前を当たり前としてスルーせず、全員に可能な限り同じように伝わるよう明文化し、意思表示するというのは、このような全く新しいコミュニティを作る場では必要かつ重要なプロセスだった。

稽古場では、主にどのように演出家がパフォーマーとの関係を取っていくのかを見るつもりだった。しかし、始まって早々、今回のディレクションチームの関係の取り方が多くの演出家と違うのを目の当たりにし、困惑してしまった。敷地理さんとネス・ロケさんがほとんどパフォーマーと同じように体を動かし、同じ場所に立ち、様々な言葉と身体でコミュニケーションを取っていたからだ。ディレクションチームの2人も出演するのと思うくらい、パフォーマー同士と変わらない関係性に見えた。そういった点においても、敷地さんとネスさんは“ディレクションチーム”であって“演出家”ではなかったように思う。通常の演出家の振る舞いではなかったものの、やはり次第にパフォーマーとの関係性は変わっていったのも非常に興味深かった。一ヶ月間稽古場と劇場に通い、クリエイションの場で関係性に影響のあると感じた事象を、以下に箇条書きで記しておく。

- ・ 演出家からパフォーマーへのリクエストの出し方  
(具体的か抽象的かやって見せるのか、渡す情報のコントロール)
- ・ 演出家とパフォーマーの物理的な距離
- ・ 演出家の態度と目線
- ・ 演出家からスタッフへの情報共有の密度
- ・ 演出家とスタッフとの関係性と、それらがパフォーマーに与える影響
- ・ 言葉の選び方
- ・ ある言語への共通認識の形成
- ・ 作り方の共有・理解・同意
- ・ 何かを決定する際の同意の取り方・言葉の選び方

今回見学した中で、演出家から発せられる情報がどれほどまわりに伝播しているのかを痛感出来たのは、非常に大きな収穫だった。これほどまでに演出家が発する情報が周囲に与える影響を観察したことは、これまでにない経験だった。座組の中で影響を与えたこと（与えられたこと）はあるが、決して客観的に判断出来たことはなかったと思う。応募時の想像よりもより濃くクリエイションの現場を見学することが出来たのは、大きな実りだった。

Campでは、ファシリテーターの持つ人柄がどれほど座組に関係するのかに関して痛感することになった。

Campは初回から想像以上に参加者がウェルカムでリラックスした状態に見え、非常に驚いた。私は自分を開くのがあまり得意ではなく、Campの始め数回は他の参加者の開きっぱなし具合に困惑し、また自分がうまく開けないことに対しての少しの後ろめたさもあった。どうしてこれほど開いていられるのだろうか、ましてやオンラインでの開催などもっと心身共に距離が出来てもいいくらいだと思うが、まるで2年も3年も一緒にいるかのような穏やかさだった。どうすればオンラインでこの雰囲気にすることが出来るのだろうか、とずっと不思議だったが、最終公開プレゼンテーションでようやく私なりの答えを見つけた。それは、ファシリテーター2人の人柄だった。身も蓋もないかもしれないが、JKアニコチェさんと山口恵子さんの人柄こそがいち早くみんなを溶け込ませたのだと思わざるを得なかった。山口恵子さんはこれまでも度々、にこにこしながら泣いていた。悲しい涙というよりは、いつも感涙といった感じだった。JKアニコチェさんもずっとにこにこしていて、前のめりで取り組みに興味を示していた。ファシリテーターの立場にいる2人があまりにも素直すぎる感情表現をし続けてくれたことで、オンラインにおいても驚くほど早く自身を開くことが出来、暖かでフラットな関係性になれたのではないだろうか、というのが私なりに見つけた答えだった。

上記の体験から、以前から自身も意識していた「クリエイションにおけるフラットな関係性」について少しだけ認識が深まった。YFF参加前までは、クリエイションの座組は忌憚なく意見が出るように可能な限りフラットな関係性の方がいいだろうと考える反面、本当にフラットになってしまったらクリエイションにならないのではないかと、という疑念も持っていた。しかし、様々なセクションが参加する今回のExhibitionと、様々な専門を持つCampのどちらのプログラムでも、自分の仕事と相手の仕事の線引きが強く意識されていたのを目の当たりにし、少し考えが変わることになった。「どこからどこを自分の仕事として任せてもらうか」というのは、逆にすると「どこからどこかまでを相手に任せる」という信頼がなければ成り立たない。つまり、「責任と専門の線引き」をうまくデザイン

し、信頼しあえる関係性になることによって、健全かつ有機的でフラットなクリエイション環境となるのではないか。そのためには、互いを信頼し合い、互いの専門性や特性を尊重し合う考え方を共有することから始めなければならない。

そもそも、他者と他者のまま関係を持つというのは、自己との線引きが必須だ。自分を尊重しなければ相手も尊重出来ない。相手を受け入れるためには、自分のことを受け入れなければならないんじゃないかという大前提を、Campの最終公開プレゼンテーションに参加しながら考えていた。私が相手との違いを認識して受け入れることで、相手も私を受け入れられる。目の前にいる他者が信頼できる相手なのかなどわかるはずもなく、どこまでいっても他者を信頼するというのは何の安全性もない不安なことだが、そのためにガイドラインが設定され、CDTというセクションや第三者の存在がコミュニティ形成において重要になってくるのだろう。

### 一回性のもと、出会ってすぐに別れるという瞬間的な関係性（観客と作品）

作品を作るためにアーティスト達が出会い、作られた作品は観客と出会うことになる。演出家の仕事は、いくつもの関係性を多角的にデザインすることだと考えられるだろう。クリエイションでの人間関係を始め、作品内の構造から作品と観客の関係性まで、場合によってはその先の作品と未来の関係性までを客観的にデザインする専門家だ。

一回性の芸術である舞台作品と観客が出会えるのは、たったの一回。多くの場合、初対面で出会い、そのまま一生同じものを見ることは出来ない。このたった一回でどのように作品と出会って欲しいのか、明確に想像して出会い方をデザインする必要がある。今回の東京芸術祭では特にFrom the Farm『フレ フレ Ostrich!! Hayupang Die-Bow-Ken!』において、観客の状態へのアプローチが試行されていた。Campの最終公開プレゼンテーションでは、放送局のロールプレイという導入が、観客を引き込ませ、作品と観客の関係形成に有効に働いていた。

しかし、観客との出会い方のデザインというのは、実際のところ演出家だけの仕事ではない。例えば作品に辿り着く前の導線を引くのは制作や運営側であり、今回のようなプロセス重視のExhibitionでは特に必要な役割を担っていたと思う。それらのことは知識として、経験としてはわかっているのだが、クリエイションの最中にどこまで観客のことを想像出来ているだろう、と自身を省みる。いかに様々な観客に、演出家として望んだ観劇体験を手渡せるか。YFFの活動を経て、作品と観客にも“関係性”が築かれる、ということがどういうことなのか、ようやく考え始められるような気がしている。「見る／見られる」という関係性ではない形で、作品と出会ってほしい。会場にいる全員が大きな流れの中にあるような、一方通行ではなく相互のコミュニケーションが可能な作品とは、一体どんな作品なのだろう。そしてそれは、どのようなコミュニティであれば創作可能となるのだろう。

また、Exhibitionの本番を見ていて、国際クリエイションかつ、パーソナルな身体性とスポーツを主軸とした作品だったためか、言語でのコミュニケーションというものがどういうことなのかを多く考えさせられた。

作中では観客に向かって英語で質問を投げかける場面があった。理解が可能な言語だと「わかる」と思いがちだが、果たして私たちは本当の意味で「わかって」いるのだろうか。もしかすると、言語を介さないコミュニケーションの方が真実性が高いのかもしれない。敷地さんが試していたスポーツ然り、言語による情報ではないコミュニケーションが持つ可能性について考える。例えば、身体表現の分野での、自分の身体を持ってして自分のまま他者と交流が出来るというのは、演劇ではなかなか

生まれたいコミュニケーションの仕方だ。自分は自分のまま、流れていくものや流れてきたものを受け入れ、お互いにノリあうというのは新しいコミュニティを形成する上でとても近道のようにも考えられる。相互理解をするために言葉を用いないというのは、言葉であーだこーだ考える私（や多くの演劇クリエイター）にとっては実践するのにかなりのハードルがあるが、正直なところExhibitionにおけるパフォーマー達とディレクションチームの身体的な関係の取り方は非常に羨ましかった。

だが、素敵だと思う反面、言語を介さずに行うコミュニケーションの限界や、想像すること自体の暴力性についても考えなければならないだろう。コミュニティにおける「セーフスペース」は確認と同意の連続でしか作り得ない。空気を読むことが重要視されるコミュニティや、NOと言えない関係性では冗長な同意のやりとりは省かれがちかもしれないが、過ごした時間も共通言語や同意事項が少ない間は、むしろ言葉をたくさん交すというコミュニケーション方法を選択するしかセーフスペースを作る術はない。最初から最後まで明文化して伝えるというのは一見効率が悪いように思うかもしれないが、共通言語や同意というのは、おそらく長い時間をかけて言葉を交換し合い、認識と言語と感覚を共有し、理解し合うことによって作られていく。むしろ、そうすることでしか形成され得ない。この一見冗長で面倒臭い、全てを言葉にするコミュニケーション方法は、作業を円滑に進める（あるいはやりたいことを共有する）という以外に、コミュニティにおいてお互いの“信用”の問題にも関わってくるだろう。

また、今回ほとんど始めて国際クリエイションの場に参加して、自分の生活圏ではない場所への認識の荒さを自覚することとなった。一ヶ月間、本当に知らないこととの出会いの連続だった。例えば使ってはいけない身体の部分があることや、お祈りの時間があること、各国の文化や歴史など、自分の認識の荒さと知識の無さをはっきりと自覚する時間だった。もちろん、国際クリエイションにおいて、参加者の文化圏のことや開催地のことを知り尽くしておくというのは到底無理な話だろう。しかし、可能な限り事前に勉強するべきかつ、知らないを「知らない」と言うこと自体の意味を考え続けなければならない。“当たり前”などどこにもない。国際クリエイションの場だけでなく、同じ文脈を持った人達とのクリエイションでも気をつけるべきだろう。期間中の知らないことの連続は、次第に翻って自分のパーソナリティについてを考えることとなった。果たして自分は一体何を知っているのだろう。他者のことを知る度に自分のことも知ってきたと思っていたが、もしかすると私は自分の住んでいる国のことも、自分の話すこの言語のことも、自分のことすら知らないのかもしれない。

## おわりに

今回“関係性”という観点からExhibitionとCampを継続的に見学した中で「クリエイション時にパーソナルな開示は必要か？」という新たな疑問が生まれた。個人的には開示をしなくてもいいような環境づくりをしてきたつもりだ。個人的な開示を必要とせずクリエイションは出来る、と考えていたが、場合によっては個人的な記憶や個人的なものの共有が必要な場合があるのもわかる。しかし、そのような状況になった時、どのような環境づくりが出来るだろうか。どのように負担なく、安全な場を作れるだろうか。それともやっぱりクリエイションは個人的な開示をせずとも可能なのだろうか。

上記について、まだ答えは出ておらず、どのように考えたらいいのかわからない。今後自身の年齢や立場が上がっていくにつれて更に無視できないことになっていくだろう。引き続き、考え続けていこうと思う。

最後のYFFの参加者同士で東京芸術祭ファームの参加以降に考えたことをシェアする会にて、そもそも私は「アジア」という文字が指すものに対しての実感がほとんど無いということに気がつき、我ながら残念な気持ちになった。漠然とした地球規模の世界を想像することはあっても、これまでの人生で自発的にアジアを想像したことはほとんどなかった。また、同じ場にて、「東京」という文字も議題にあげられていた。国際クリエイションを一ヶ月ほど体験してきて、翻って今自分たちがいる場所を考えざるを得なくなった、というのはなんだか今日本に住んでいる若者の思考回路として、至極真っ当なようにも思えた。

ExhibitionとCampどちらのプログラムでも、参加者はみな自分の周りを取り巻く環境（政治や環境問題や出自など）についての考えをはっきりと持っており、自身の専門に関しても深い理解があると感じていた。左記のような自身への理解度によっても、コミュニティへの関わり方は変わってくるだろう。私も、自身や自身の専門性に対して尊重出来るよう、そして、また違った関係性で再び東京芸術祭に参加出来るように、これからも様々な場所で柔らかく、舞台芸術という集団創作を続けていこうと思います。

最後に、東京芸術祭、東京芸術祭ファームを支えてくださったみなさま、YFFを快く受け入れてくれたFarm-Lab ExhibitionとAsian Performing Arts Campのみなさま、かけがえのない貴重な体験を、本当にありがとうございました。またどこかでお会いした時には、私から何かをお渡し出来るよう、これからも活動を続けます。



Photo: Miula Ulin

三浦雨林（みうら・うりん）

— 東京（日本）

1994年生まれ。演出家、劇作家。日本大学大学院 芸術学研究科 舞台芸術専攻 修了。隣屋（主宰/演出/劇作）、青年団（演出部）、鳥公園（アソシエイトアーティスト）。芥川龍之介の小説や、レフ・トルストイの戯曲など既存の作品を原案に、文字としての言葉と発話される言葉の差異を際立たせる手法で劇作・演出を行う。2020年以降、映像・美術を中心とするインスタレーションの手法も用いた演劇作品を発表している。

<https://www.are.na/ulin-miula>